

人は歩るいた。

外見は足どり勇ましく揚々としてゐても、其の實油揚を何時焉に擢はれるかも知れないと言ふ風な不安と、巡察に對する強迫觀念に、僕の心は引き絞られてゐた。

見えつ隠れつ後から、一人の脊の高い上衣のボタンを外した男が追いて来る。

軍人を装はふ刑事ではないか、僕は頗る緊張した意氣で以て立ち止つた。

『戀路の邪魔する奴は打ち据えるぞ』

女は五六間先になる。

洋服の男は大またに、ピョコ／＼飛び乍ら何かつぶやいて、女に合圖をして行き過ぎて了ふ。

昂奮した僕の耳には、大砲の音も聞えないのだ。

石橋のところまで来た。

何うしても今夜は、僕の家まで来なければ怪しい、變だと僕は言つた。

態と大通りを通らないで、川沿ひに新川橋を渡つて、女の腕を左の手で固く握つて放さなかつた。逃れられない運命を脊負つた屠所の羊の如く、女は従順であつた。